キッチンリトグラフ・プロジェクト

Super Galleryの壁にはまだキッチンリトグラフで作った作品はまだありません。7人の版画作品が掛かっています。キッチンリトグラフは、本来なら石版やアルミ版で行うリトグラフをキッチンにある道具を使う簡単なリトグラフです。版はアルミホイル、製版はコーラ、印刷はスプーンやしゃもじ。版に絵を描いてから1色を印刷するのに2、3日かかるリトグラフが、キッチンリトグラフではほんの数分で印刷することが出来ます。この手軽さがキッチンリトグラフの大きな魅力です。

ここで少しリトグラフが発明された220年前のことを想像してみましょう。ミュンヘンに住むアロイス・ゼネフェルダーが地元で採れる石灰石を使って試行錯誤の末に版材を彫りもせず印刷する方法を見つけます。そのきっかけになったのが石灰石の表面に油性クレヨンで文字を書いたあとに薄めた硝酸を塗った後の石の表面におきた変化への気づきでした。その変化とはクレヨンで書いた文字は水を弾き、それ以外の部分は水を保っていたことです。当時印刷方法について研究していたゼネフェルダーは、水は油を弾くのだから石の表面にまんべんなくインクをのせても、文字の部分にだけインクがのるのでは、という発想に至ります。つまり「描いたままがそのまま印刷できる！」。
その後、リトグラフはまたたくまに技術開発が進んで精密なイメージを印刷できるようになるのですが、キッチンリトグラフをしていると「描いたままがそのまま印刷できる！」というリトグラフの原初の驚きを経験しているような感覚になります。

Super Galleryの壁に版画作品を展示している7人もこれからキッチンリトグラフを体験して作品を制作します。普段の制作の中で磨きをかけた技術も使えず、　戸惑いながらの制作になることでしょう。いつもの手慣れた楽器を取り上げられて、突然オモチャの楽器で演奏しろ、と言われたようなものかもしれません。この不自由さの中から何が生まれるのでしょうか。

リトグラフの面白さは、絵の技術や経験ではなく「描いたままがそのまま印刷できる」ことにあります。アルミホイルを前にし、チョコレートを手にした人は平等に「描いたままがそのまま印刷できる！」ということです。
このフラットな技法で制作された作品で、これから行われるワークショップの参加者とともにSuper　Galleryの壁面を埋め尽くすことをとても楽しみにしています。

2020.1.25
片山 浩

片山 浩　Hiroshi Katayama

アーティスト
1971年大阪府生まれ、愛知県在住

版画（リトグラフ）や絵画を中心に制作しながら、展覧会やワークショップなどの企画も行う。また2016年よりリトグラフをより考察し新たな展開をするためのアーティストグループ「LITHOGRAPH:Lighter but Heavier」のメンバーとして、「Stone Letter Project」（兵庫、バルセロナ・スペイン、京都、愛知で開催）の展示などにも携わっている。
近年の主な個展に「Sedimentary　memory」（O　gallery、東京、2018年）、グループ展に「Layer」（L　Gallery、愛知、2019年）などがある。
www.hiroshikatayama.com

Super Exhibition vol.01

キッチンリトグラフ・プロジェクト
Kitchen Lithograph Project

2020.1.25［土］– 3.14［土］

キッチンにある身近な素材（アルミホイル、石鹸、バター、炭酸飲料、チョコレートなど）を使って版画を制作する「キッチンリトグラフ」のワークショップと作品展示を行います。版画作品を制作し、発表するアーティスト・片山浩（1971年大阪府生まれ、愛知県在住）を講師に迎え、版画の技法に触れて、楽しむプロジェクトです。コピー機を使って版をつくる「ペーパーリトグラフ」のワークショップも会期中に開催します。

イベント

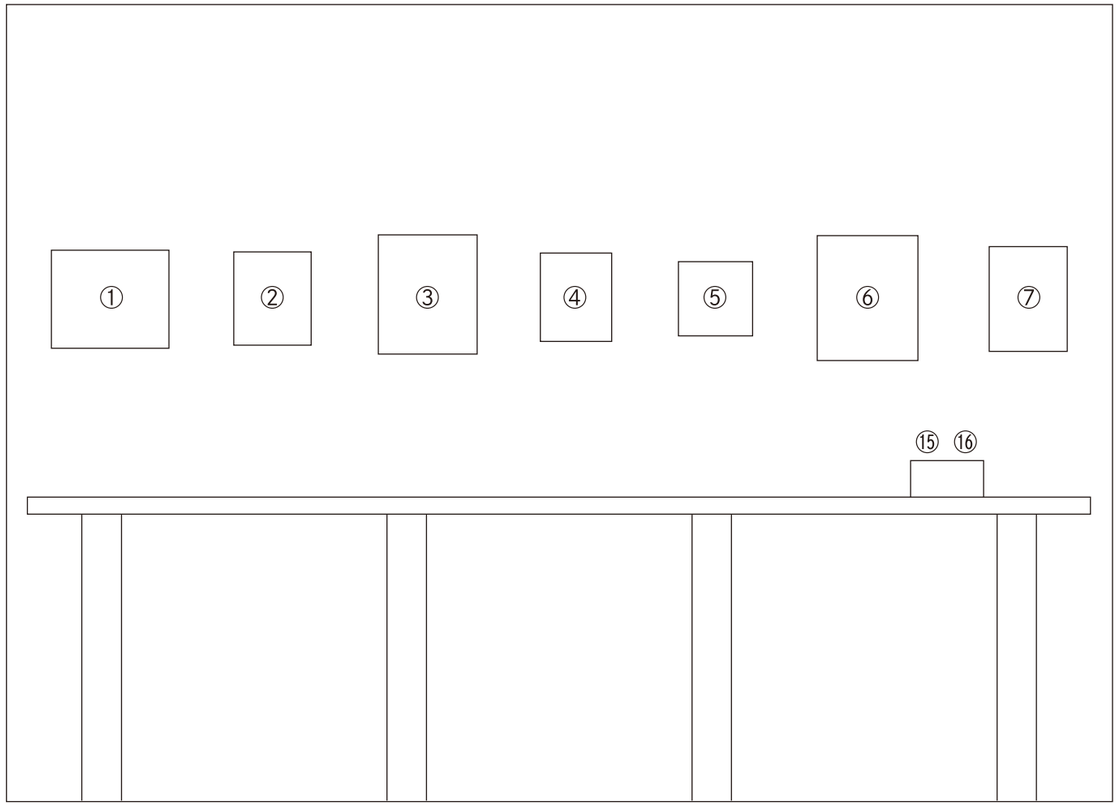
キッチンリトグラフ ワークショップ
2月8日（土）15:00–17:00
会場｜港まちポットラックビル
定員｜10名（予約優先）
参加費｜無料

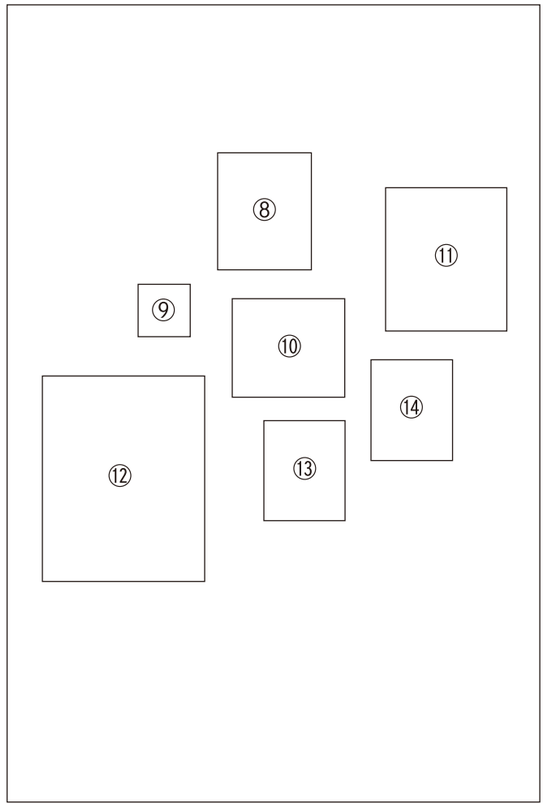
ペーパーリトグラフ ワークショップ
2月29日（土）14:00–16:00
会場｜港まちポットラックビル
定員｜10名（予約優先）
参加費｜無料

*ワークショップ予約はWEBサイトをご覧いただくか、
港まちポットラックビル受付にてお申し込みください。

会場｜Super Gallery
企画｜Minatomachi Art Table, Nagoya [MAT, Nagoya]
監修｜渡辺英司　主催｜港まちづくり協議会

Super Gallery
Minatomachi Art Table, Nagoya MAT. Nagoya
港まちづくり協議会 JOINT COMMITTEE OF PORT TOWN





片山 浩 / Hiroshi Katayama

1971年大阪府生まれ
www.hiroshikatayama.com

③ 《blink #8》| 2018 | リトグラフ／アルシュ

⑫ 《blink / on the road》| 2016 | リトグラフ／アルシュ

映画の1シーンをリトグラフの描画材の解墨を使って描いています。解墨はコントロールが難しく同じように描いても毎回少しづつ変化するところが、まばたきをするたびに少しづつ変化する目の前の景色のようであったり、映画のシーンの前後のコマのようであったりするようだなと思っています。

衣川泰典 / Yasunori KInukawa

1978年京都府生まれ
www.kinukawayasunori.com

⑦ 《my little stone_place S》| 2019 |
石版画／雁皮紙、いづみ

⑧ 《my little stone_place M #1》| 2019 |
石版画／雁皮紙、いづみ

⑮ 《my little stone_リュウオウギク#2》| 2018 | 石灰石

⑯ 《my little stone_リュウオウギク#3》| 2018 | 石灰石

日本で石灰石が採取できる場所は数多くある。石灰石がある山や川をリサーチし、採取した石灰石を用いて実験的に石版画印刷を試みている。この実験は石版画の技術の発見をしたアロイス・ゼネフェルダーの試みを追体験するような趣きもあるが、長い年月をかけ地球から産み出された石を用い、どのような表現ができるのか興味がある。山に、川に転がっていた石は何を見てきたのか。人間のような意思や感情が石にある訳はないが、石を採取した場所の風景を石に描いている。小石の断面に描かれたイメージはカメラのレンズを通して見た風景と石の記憶を重ねることができるのではないかと想像している。

近藤千鶴 / Chizuru Kondo

⑥ 《金玉満堂》| 2018 | 水性木版、ラメ／和紙

⑪ 《鯛釣白兎》| 2016 |
水性木版、エンボス、ラメ、鉛筆、糸／和紙

吉祥の意味を持つモチーフを組み合わせて、浮世絵と同じ技法の水性木版で制作しています。鉢の中を泳ぐ2匹の金魚の図を"金玉満堂"といい、富裕、幸福の象徴とされています。

玉井裕子 / Yuko Tamai

1979年愛知県生まれ

⑤ 《桃色月の夜に》| 2019 | 水性木版／和紙

桃色の月が浮かぶ、やわらかな夜のやわらかなできごと。夜空には空気感のある木目を選んで3色を摺り重ね、白く浮いているものたちは彫り跡がやわらかくなるように版をつくりました。

⑬ 《よるのできごと》| 2019 | 水性木版／和紙

すきとおった夜の、ひそやかなできごと。木目を縦に使い、透明感のある色をグラデーションにしながら摺り重ねました。下の方には銀色も重ねています。

中田由絵 / Yue Nakada

愛知県生まれ

④ 《I'm a flower. The name is Ping Pong Mum.》
| 2017 | エッチング、アクアチント／ハーネミューレ

⑭ 《I'm a flower. The name is Ranunculus.》| 2017 |
エッチング、アクアチント／ハーネミューレ

最近は森の中の風景や身近な植物、生き物をモチーフに、光と色の関係性を意識しながら絵を描いています。儚く美しい瞬間を表現したいと思っています。今回出品している作品は、銅版画。エッチングとアクアチントを使った2版多色刷です。

森田 朋 / Tomo Morita

1974年生まれ

① 《似た者同士》| 2019 |
エッチング／雁皮紙、ハーネミューレ

⑩ 《五月の庭》| 2018 |
エッチング、モノタイプ／雁皮紙、ハーネミューレ

絵を描くのが好きで、学生の時に銅版画に出会って以来、マイペースに制作を続けています。

簗瀬貴子 / Takako Yanase

2001年銅版画の制作をはじめる

② 《Packing the Sunshine》| 2019 |
ハーネミューレ紙に銅版画

⑨ 《Sosein》| 2019 | 銅版画／ハーネミューレ

心の奥の思いや、日々のささやかな存在から着想を得て、視点をずらしたり、組み立てたりしながらイメージを広げるように制作しています。私的な心情と無我でフラットな感覚が、ひとつの作品の中で共存していることをいつも意識しています。銅版画、特に直接法であるドライポイントとルーレットは、思いを込めることと、無心になることを即興的につなぎ合わせてくれる、とても好きな技法です。